

# 平和人権教育と国際連帯部会

## 研究テーマ「平和・人権・国際連帯の広がりをめざして」

### I 研究の内容

- 1 部員それぞれ一人一実践を行い、部会で報告し、研究討議を行った。毎回最後に手塚茂松校長先生（奥野田小）、八巻登教頭先生（山梨小）に指導助言をいただいた。

実践発表者	6月 3日	中村裕司（玉宮小）	太田一美（井尻小）
	9月 2日	三森公仁（塩山南小）	統一授業研
	9月30日	的場泰子（日下部小）	岡安男（三富小）
		腰巻笑里美（八幡小）	
	11月25日	前島国学（菱山小）	岩下 城（牧丘一小）
	2月 3日	廣瀬剛（日下部小）	統一授業研
	2月18日	保坂千恵子（日下部小）	高添勉（菱山小）
		岡ひさ江（菱山小）	

- 2 7月2日には 「第28回 甲府空襲 戦争と平和 環境展」の視察を行い、身近にあった戦争に関し理解を深めた。

### II 成果と課題

平和・人権、国際連帯と今年度も多様な実践を各自が行うことができた。どの実践も今日的な課題からアプローチができた。本部会は、人数が少ないが、一人一実践ということで多くの実践に触れることができた。報告された実践は、目の前にいる児童の実態を把握し、その上に教師の願いをのせるところから授業案作りがされているので、どの実践も児童の心に響く内容となっていた。また、それが身近なもの・即実践につながり、共有財産とすることができた。実践を発表するだけでなく、様々な資料を持ち寄っての研究を行うことで、授業素材を発見したり新たな見方を持つこともできた。部会内で情報交換した内容が以後の実践に活用されて報告されることもあり、お互いに補足したり追実践したりしながら研究を深めていくことができた。

身の回りの身近なところに教材になる物がたくさんあるので、日頃からアンテナを高くしていく必要がある。「広がり」ということを考えるのであるならば、出された実践を部会内で留めておくのではなく、部会外にも広げていけるようにしたい。また、報告を聞くだけで終わるのではなく、追実践したり自分なりにアレンジして実践することで、完成度を高めていきたい。研究内容が広いので、年度ごとに内容を絞って研

究していくのも一つの方法である。

その授業だけでなく、日常生活（学校生活全般）を通して指導を継続していくことが大切である。

### Ⅲ 成果物

#### 1 塩山南小 三森公仁先生 第5学年 道徳

「かけがえのない命」 ～一人ひとりの人権意識を高める実践～

子ども達にとって対象が身近であればあるほどその人の人権を考えない面がある。体の不自由な人に対しては、その人が何を欲しているのかを考えようとして行動にもすぐにあらわすこともできる。しかし、自分とさほど変わらない友だちに対しては、その少しの差を時にはとても激しく責めてしまう傾向がある。身近な人の人権も大切にできるように日々の生活の中や学習の中でことある毎に子ども達とともに人権について触れ・考え・学んでいくことを通して一人ひとりの人権感覚を高めていく必要がある。このような授業者の強い願いがよく表れているすばらしい授業だった。

児童の特徴をよく捉え、授業者の語り口・教材提示の仕方が工夫されていたため、児童が集中して取り組んでいる様子がうかがえた。子ども達が教材の内容をよく理解しており、実践の積み重ねがしっかりされていることがわかる授業だった。指導が大変という児童からもクラスを意識している行動が見られ、授業者と子どもの信頼関係ができていたことがわかった。一人の立場に立って考えさせるのではなく、いろいろな登場人物の視点で考えさせることで、よりねらいに近づくことができた。児童理解・問題点の把握が的確にされた上で作られ、実態に合わせて進められている授業で、部員全員にとっても非常に価値のある授業だった。

#### 2 日下部小 廣瀬剛先生 第1学年 特別活動

「金メダルを贈ろう」 ～望ましい人間関係の育成～

相手の気持ちを考える第一歩として、一人ひとりに自己肯定感を与えること。自分を認めてもらえるという経験を喜び・自信につなげ、さらには他者を尊重する気持ち・思いやりにつなげていく心が温かくなる授業だった。どの児童も相手のいいところを一生懸命探し、丁寧にメダルに書き込んでいた。時間のかかる作業だったが個人差に応じて課題が設定されており、集中力を切らすことなく取り組んでいた。全体の場で発表することでクラス全員に認めてもらうことができ、渡した方も渡された方もとてもいい笑顔を見せていた。二人組のペア構成についても児童の実態から考えられており、授業者の想いや願いが強く表れている授業だった。その後の研究会では、他者を認めることで自分もよくなっていくということ意識させられると子どもは伸びる。教師が認めてあげることも大切だが、子ども達同士で認め合えるような場や機会を作っていくことも重要だという確認がされた。また、全ての学年で同じような実践をしてつなげていきたいという意見も出された。授業者の子ども達に接する態度・穏やかに語りかけるような口調など、研究同人にとっても多くのものを学ぶことができる授業だった。

(部長 岩下 城)